

パンク

赤谷慶子

長月のある日、ゴルフに興じたる後、愛車に異變起りき。愛車はエンジン稼働すると真ん中にありし畫面作動し、まづは運転手の顔認識を行ふ。本人の顔と認めざる時はパスを入力せむとエンジンはかからず。その畫面には道案内、車内の温度管理等々ざらりと指示する箇所の繪柄並ぶ。音符の記號はBluetoothウースに繋げるおのれの携帯電話にしつらへたる音楽を作動す。加へて外部より電話かかるとハンドルの操作にて呼び出だしに應ずることを得。いま一箇所小さき「畫面」ハンドルの真ん中にあり、そこに「空気の減少あれば、至急確認すべし」と警告灯浮かび上がりき。その警告消えねば、ゴルフ場近隣のガソリンスタンドへ寄り、車輪の空気を測らせたり。圖らざりき、左後部車輪の空気を、通常は2.2barなるに僅々1.1bar、小さき穴より空気抜け出づる破裂にあらずやとの由。計測せる人曰く、ベントの計測、我が店の力及ぶ所にあらず。なんぞアクアラインを渡りて東京へ戻り、かかりつけの整備工場へ行かざる、と。

ヤナセの營業擔當者に電話入れ、警繼を消して再起動する指示を仰ぎ、やがて歸宅せり。翌日十時に整備工場開店と同時に車輪を見てもらひ、釘刺さりたる事判明す。かくて、車輪の空気の減少せるに高速を走りしため、車輪の周辺の強度危ふくなりたれば車輪交換すべしとの指示なりき。車輪はイタリアのピレリ製にて、在庫見定め取り寄すとの事。甚だしき出費となり、愕然とせり。

(令和七年九月三十日受附)